

Title	會員よりのたより
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1942), 22(251): 173-174
Issue Date	1942-04-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/168365
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會員よりのたより

續々「鳥か? 星か?」

拜啓 天界の「鳥か星か?」の現象を小生も月面観察中に數回見てゐます。これについて、小生も多分鳥だらうと思つてゐます。直覺的に蝙蝠に見たことが一度あります。しかし蝙蝠や鳥の大きさを10糧位とすれば、角度で10秒位に見えるときは、高さ四千米位のところを飛んでゐることになり、一寸常識では考へられません。又、鳥ならば必ずしも一直線に鳥んで行くとは限らないのに、この現象の「黒點」が必ず直線的に飛んで行くのは不思議です。流星と考へるにはスピードが遅すぎます。流星なら月面を横切るに要する時間は10分の1秒位なものでせう。

此の現象は常に日没後間もない頃に見てゐます。眞夜中に見たことは一度もありません。太陽観測中にも度々見てゐる人があります。

右御知らせ致します。敬具

(一月19日)

(ユイトビヤ生)

口 繪 に つ い て

前略 兼て製作中の16.6糧反射自作經緯儀が、この度、ほど完成致しました。同封の寫眞御笑覽下さい。集點距離は少々長く1550mmで鏡は故中村要氏研磨の中村鏡です。近き將來には赤道儀式に改造する豫定です。ファインダは口径31耗色消 15X で、視野も明るく大變廣う御座居ます。主鏡の接眼鏡は種々取替へ4mm, 6mmオルソコピツク, 9mm, 12.5mmモノセントリック, 15mm, 18mmハイゲンス, 20mmミッテンツワイ25mm, 30mmケルナ1で、近々直視分光器も出来る積りですが、各種取まぜ eyepiece が9個附屬してゐます。

先年1941年度の火星は1939年度の射手座から山羊座にかけての低緯度大接近に比較し、今回は位置も魚座から羊座に架けての高緯度接近期で有りました。小生も昨夏完成の木邊鏡 16cm にて火星も充分觀た積りですが、何分あの悪天候の連續ではスケッチも出來ず、十月3日の火星對衝後は天候もどうやら好轉し快晴に恵まれましたが、十一月以來 Seeing が悪化致しましたには困りました。裏はあの仙臺堀川の河水が上昇しますので6mm 以下の高倍率は無用で、Seeing の平均スケールも6よりは上らず、最高 Seeing 8.5位でした。そのため見取圖も100枚を少し出た位であり、結果も詳しく有りませんでした。火星

もう日1日と遠ざかり。次回は1943年に又観る積りです。宵の西空には金星木星土星が巨光を放つてゐますが、木星は昨秋以來北赤道帯一帯が青色をおび、時に赤色が強くなる事もありましたが、非常に複雑の様です。同封の木、火星スケッチ充分御笑覽下さい。

金星も大變南半球の白冠が良く目立つ様です。166耗鏡も今後遊星面を大いに専用とする次第です。

(一月16日)

(保積善太郎)

編輯後記

インチを棄てよ！ ドイツに習つて、メートル法に徹底せよ、大東亞圏の指導者たるべき我々が、英米の尺度から縁が切れないとあつては、面目無い話です。今後本誌上に於いては、インチやマイルを絶対に用ひませぬ。又、若し原稿中にインチやマイル等が書かれてあれば、編輯室では之を換算して上げます。●エイトケン博士の“白色の矮星”は、譯文ですから、少々ギョチないですが、しかし、學界の珍星を解説したものですから、ゆつくりと、味はひつゝ讀んで下さい。水の何千倍、乃至、何十萬倍といふ密度の持ち主である此等の星々は、地球上の物理學者や化學者が全く了解し得ない現代の七不思議の一つですが、ひとり天文學者の手によつて、こうした超物理學が解かれて行くのです。●山本會長の星座の研究文は、これからも續々出る筈です。熟讀願ひたい。星座のことなどは、もはや卒業して了つたと思つてゐる會員が多いかも知れませんが、しかし、決して早合點してはなりません。星座には、まだまだ研究すべき問題が澤山あるのです。この號の會長の文を見ても、例へば、星座の邦譯名の問題などに、明快な指示が與へられてゐます。と同時に、又、“オヤ々々さうなのか?!”と思はせられる事が所々に見られます。次號には“學者の忘れてゐる星座”が連載されます。●畝川氏の妙見星の記事など、他にもいろいろあることと思ひます。日本内地のみならず、大東亞圏のあちこちから新材料を拾ひ出すやうな専門家も、追々現はれて貰ひたいものです。●ガリレオ傳は愈々妙境に入ります。學界の奇人として、三百年の昔から毀譽褒貶の渦中に置かれてゐる此のガリレオの、之れは最も嚴正公平なる解説であります。惡魔か、學聖か、狂人か、天才か？ 盟邦イタリヤが生んだ此の名物男の正體と其の正しい批判を、其の死後300年の今日、靜かに味はつて見ることも、興味あるわけです。このガリレオの如き、波瀾の中の學者が、昭和の今日も、尙、どこかに見出されないでもありますまい。そして、世間は此の如き學者を、如何に待遇しあるか?! (T)